

故 関谷孝英君を偲んで

関 谷 君 追 悼

・ 関 本 至

関谷君の訃を耳にしたのはつい最近のことである。広島の方は誰も知らなかったが、この二月十八日に亡くなったのだという。それもふとした事故によるのだとのこと。三十になったかならぬかのこの好漢を天はわれわれから奪ってしまったのだ。悲しいかな。

関谷孝英君は山口県の出身、昭和36年広大入学、41年3月卒業、朝日新聞西部本社に入り、爾後記者として活躍していたのである。

家庭の事情だったか、1年おくれて卒業したが、在学中一時東京へ行ってアルバイトをしていたことがある。その折、運転した自動車が効外電車の踏切りでエンコしたスリルにとむ話もきいた。また阿多田島でのキャンプの際、釣り舟の上で脚に巻きついたタコと必死の格闘をして船底にそれを叩きつけた光景も思い出される。そうした、むしろ教室外での彼の愉快的行動の数々が念頭に浮ぶのである。

いよいよ卒業間近に、新聞記者になりたい一念で二三の入社試験を受けたがうまくいかず、ついにK金属に入ることになった直後、朝日の西部本社に採用の通知があり、二人でK金属へ出向いで平謝りしてそちらを取消してもらった時の彼のひたぶるな顔も忘れられない。よくよく新聞記者になりたかったのだ、また実際それは彼の性根によく合っていたと思う。

こうして、小倉、長崎、を経て、下関支局づめになったのが2、3年前であっただろうか。忙しい記者生活の余暇をみつけて広島に遊びに来るのが彼の大きいたのしみであっただろう。拙宅にも時折訪ねてくれて、その記者生活のさまざまな体験や感想や時に鬱憤なども語って行ってくれたのだった。この正月にも訪ねてくれて、社会悪と戦うのだという彼年末の抱負とその具体的なキャンペーン（記者としての）を披露しつつ、またその力の限界についての一種の諦観めいた言葉をも残して行った関谷君、一面陽気で一面さびしがり屋でもあったと思われる関谷君、君のあの独得な、時に自嘲的なとも見える笑いもう行び目にすることができなくなった。卒業生としてはじめての他界者である。淋しくてならない。ありきたりの言葉ではあるが、しかし心より冥福を祈るものである。

（10月17日）